

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata* Butler

【選定理由】

愛知県の本種は、鳳来寺山から 1937 年に初めて報告されたが、しばらくの間採集例がなかった。戦後になってから、名古屋市や犬山市などから産地が見つかり(高橋, 1959)、局地的に多産する産地もいくつか知られた。これらの産地には、路傍の草地など平凡な自然環境のところもあるが、本種は県下ではヒメヒカゲやハッチョウトンボを産する湿原との結びつきが強く、新城市などに広く分布している。この傾向は岐阜県東濃地方や静岡県などとも共通する。最近では湿地が消滅するとともに本種も激減し、名古屋市内およびその周辺などではまったく見られなくなった。

【形態】

前翅長は、春型で約 20mm、夏型で約 18mm の小型のジャノメチョウ科。近似種のヒメウラナミジャノメに類似する。翅表は暗褐色で、前翅に 1 個、後翅に 1 個の眼状紋をもつ。

裏面は本属特有のさざなみ様の縞模様で、眼状紋が前翅に 1 個、後翅に 2 個ある。眼状紋の数は個体変異がある。ヒメウラナミジャノメが後翅裏面に通常 5 個あるのに対し、本種では、ほとんどの個体で 3 個、また一番上のものが最大であることから区別は容易である。♀は♂に比し、やや大きく、翅表の色彩が淡く、翅表の眼状紋の周囲の黄色の輪が広く明瞭である。春型に比して、夏型はやや小型となり、ヒメウラナミジャノメとほぼ同大となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、名古屋市、春日井市、瀬戸市、日進市、長久手市、知多郡武豊町、豊田市、岡崎市、新城市などから知られる。西部の水田地帯や木曾川の堤防、北設楽郡などの山地からは報告がない。尾張や豊田市の産地は岐阜県東濃地方の産地と連なる。近隣の長野県木曾郡南部にも採集記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。一般にその産地は局地的。東限は神奈川県小田原市、北限は福井県南部青葉山付近。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾に産する。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県や岐阜県東濃地方では、湿地、またはその周辺を生息地とするところが多く、これらの産地ではヒメヒカゲとほぼ同時に発生する。しかし、ごく平凡な路傍から得られることもある。静岡県西部では天竜川の堤防に多産する。このような堤防上の産地は愛知県では知られていない。ヒメウラナミジャノメよりは明るい環境を好む。

西南日本では通常年 2 回発生する。愛知県では第 2 化(夏型)は、東加茂郡旭町笹戸(現豊田市笹戸町、藤岡町)、旧南設楽郡海老町(現新城市海老)、旧守山区志段味町(現名古屋市守山区)、岡崎市などで 8 月下旬から 9 月中旬にわたる記録がある(高橋, 1961)。飼育では第 2 化は 8 月中旬から 9 月中旬にかけて羽化期の幅が大きい。成虫は草地を低く飛び、すぐ下草の葉上にとまる。訪花や、地面に止まる習性は乏しい。幼虫は各種のイネ科やカヤツリグサ科植物の葉を食べるが、野外での確認された食草は少ない。中齢幼虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市周辺からはほとんど見られなくなった。尾張地方全体でも激減している。東三河では、最近の観察例も少なくない。この現象はヒメヒカゲによく似ており、減少の要因は発生地である湿地の減少と思われる。路傍の草地から幼虫を採集したことがあり、舗装などによる草地の減少が原因の可能性が大きい。

【保全上の留意点】

ヒメヒカゲと同様に発生地の保全が第一である。舗装や農薬散布なども最低に留めることが望まれる。

【特記事項】

本種の年 1 化か年 2 化かは、環境によるものか遺伝的なものかが、なお明らかでない。

【引用文献】

高橋 昭, 1959. 守山市龍泉寺附近のウラナミジャノメ。佳香蝶, 11 (40): 93.

高橋 昭, 1961. 愛知県東加茂郡旭村におけるウラナミジャノメ第 2 化の採集報告。佳香蝶, 13 (48): 199-200.

(2009 年版を一部修正)

県内分布図

